－所蔵作品紹介－

難波田　龍起　NAMBATA Tatsuoki

水の上

みずのうえ

作品データはこちら

難波田龍起は明治38年、旭川に生まれている。父憲欽は、屯田兵として北海道に渡り、職業軍人となった。父の退役によって家族が東京に移ったのは、翌明治39年のことである。難波田の芸術への関心は高村光太郎との出会いによって深まり、やがて画家の道を歩むことになった。戦後、抽象美術の旗手として活躍し、その豊かな詩魂から数々の傑作が生み出された。今日なお、若々しいエネルギーでもって新しい表現を切り拓いている。

難波田は故郷北海道を度々訪れている。特に戦後間もなくの来道はその画風に大きな転機をもたらした。荒々しい北の海や原始の森に眠る湖など、彼が注目したのは北の風土と水の空間である。水の造形について思索し、新しい造形を探求する。こうして水をモチーフにして、昭和29年、三点の作品が制作された。

「水の上」はその一点である。画面は暗緑色と灰色の二つの色面に分けられている。暗緑色は水の領域であろう。そこに描かれているのは水底の幻影であろうか。上の灰色は大気の広がりを感じさせる。赤、青、黄の鮮やかな色彩と動きのある線でもって、不思議な形象が描かれている。人か動物か、生命のリズムが伝わってくる。水は原始的な力の表象であり、作者はそのなかから生命の根源的な姿を幻視したのかも知れない。

北海道の風土を内なるイメージとして描き出すとき、難波田は原始への憧れを一層強め、故郷＝生の根源を実感したのに違いない。

旭川美術館だより「氷華」No.24（1990.８発行）「収蔵作品から」より